

命について考える

蚕飼育を通して 子どもと一緒に悩みながら考えたこと

園名

氏名

たかつかさ保育園

八倉 啓

本園で行っている蚕飼育を通して、蚕に対して愛着を持って接してほしいねがいを持っています。蚕が繭になり、そこで『命』について話をする時にどのように子どもに伝えるかという課題にぶつかります。

蚕飼育を進めるにあたって、子どもの声を聴くことを大切にしてきました。日々、子どもの声を聴き、記録することで子どもの心情の変化を保育士が感じ取り、一人ひとり『命』という難しいテーマについてどのように向き合っているのか考察しました。

蚕飼育を通して私自身も悩みながら、楽しみながら進めた実践です。

「～蚕飼育を通して 命について考える～」

たかつかさ保育園 八倉 啓

① はじめに

たかつかさ保育園は京都市の北区にある定員140名の認可保育園です。2025年度の5歳児ぞう組は子ども30名、担任は私（保育士歴11年目）と保育士（保育士歴6年目）と午前中はパート職員の計3名で保育をしています。園庭には様々な木々が植えられており、園庭遊びの中でも虫と触れる機会がたくさんあります。虫好きな子が多く、毎日園庭に出ては虫を探して捕まえて飼育ケースに入れて観察することを楽しんでいます。虫を観察する中で不思議さや面白さを友だちと共有する姿があります。しかし、観察することは好きでも継続してお世話をするのが難しく、ケースの中で虫が死んでしまうことが多々ありました。命を大切にすることを子どもたちに伝えたい、愛着を持って育てる経験として毎年春に行う蚕飼育からいろいろなことを学んでほしいと思っていました。

たかつかさ保育園は和装産業が栄えた「西陣」に近いことや園舎が京都工芸繊維大学繊維学部の跡地に建っていることから、前園長の発案で20年ほど前から蚕飼育が始まりました。蚕飼育は春と秋の2回を行っています。今回は5月半ばから6月半ばの春蚕飼育の実践を記しています。

② 子どもの声を聴くことを大切に

私自身、蚕飼育に対して難しさを感じていました。繭を糸繰りする場合や作品を作る場合、中の蛹を生かしておくことはできません。そこで子どもたちと『命』について考える機会を例年持っています。どこかで買ってきた材料で何かができていくのではなく、それができていく過程を知って、その上で何かを作り、生活が豊かになることも伝えたいことの一つです。しかし、大事に育ててきた蚕の命をいただくことを子どもたちにどのようにして伝えていこうか今年度も蚕飼育が始まる前から頭を抱えていました。

私たちの法人では『子どもの声を聴くこと』を大切に保育を行っています。子どもの声を尊重することは、子どもの自己選択・自己決定を促すことに繋がります。日頃の生活の中でもそれは実践されており、例えばおやつ時間にメインとなるおやつとは別にいくつかのおやつを用意しています。メインのおやつが苦手な子はそれが苦手なことを給食職員に伝えて、別のおやつを提供してもらいます。しかし、メインとなる旬のおやつを食べてほしいという給食職員のねがいもあり「こっちも食べてみない？」とのやりとりをしています。蚕飼育の中でも『繭を使って制作物作りを経験してほしいねがい』と『まだまだ育てて大きくなる場所を見たいねがい』の双方をどのようにして思いをくみ取りながら進めていくのか非常に悩ましい問題にぶつかります。

蚕と共に生活する中で子どもたちの中でも新たな発見や蚕に思いをよせることを様々な言葉で表現していました。子どものいろいろな言葉をエピソードにしてまとめることでより深く、子どもと蚕の関わりを捉えることができました。



③ 蚕飼育が始まる

5月の半ばに約500頭の都浅黄という種類の蚕が1齢の状態ですべての保育園に届きました。この時は、小さくて黒い毛蚕のため、人間が触れると指の体温で蚕が火傷をしてしまうため、事務所で大切にお世話されます。子どもたちは小さな黒い蚕を見ると「なんかうじゃうじゃしてて気持ち悪い」「これが蚕の赤ちゃん？」と早速興味津々な様子でした。吹けば飛びそうなほど小さい蚕を愛おしそうに見つめる姿を見て、いよいよ蚕飼育が始まるなど私自身もドキドキしていました。

そこから体の色も黒から白に変わり、桑の葉をもりもり食べて大きくなり変化が見られるようになってきました。

事務所にいた蚕も子どもたちや保護者がすぐに見ることができる玄関ホールに移動されました。毎日大量の桑の葉を食べるため、職員は園庭や団地へ桑の葉っぱを取りに行き、ぞう組の子どもたちが中心となり葉っぱをちぎって蚕にあげています。蚕は葉を食べるだけでなく眠や脱皮を繰り返し、おおよそ1ヶ月弱で繭になります。5月からの約1ヶ月間、子どもたちと蚕の生活が始まりました。

・Wさんのエピソード『蚕と自分』

Wさんは糞の掃除もお手の物で蚕を新聞紙に移動させて、古い葉っぱや糞で溢れたケースを綺麗に掃除できます。指で蚕をつまんで移動させながら「この子は太っちょ」「この子はおちびちゃん」とあだ名をつけながら掃除を楽しんでいました。ある日「先生、この子色がなんか変やで」と保育士に見せてくれました。蚕は少し黒っぽく変色していました。「どうする？死んじゃうのかな」と心配そうでした。病気かもしれない蚕はすぐに別のケースに移動させてあげます。別のケースに入れられた蚕を心配そうな様子で見つめて葉っぱを入れてあげました。すると、もぐもぐ葉っぱを食べ始めました。Wさんは安心した様子で「Wもしんどかったらご飯食べられへんし、食べられるっていうことは元気っていう証拠やな」と自分に置き換えて考えていました。



・Sさんのエピソード『ブロックと蚕』

Sさんはブロックで遊ぶことが好きです。ブロックで桑の葉っぱを作り本物の蚕にあげる真似をしています。「美味しいでしょ」と蚕に声を掛けながら一緒に遊んでいました。他にも「お友だち作ってあげるわ」と言って次はブロックで蚕を作り、横に並べて楽しんでいました。

・Hさんのエピソード『踏んでしょてん』

床に一匹の潰れた蚕を発見したと子どもたちが騒いでいました。「かわいそう」「誰が潰したんやろ」と口々に言い合う中、涙ぐむHさん。私がHさんのもとに駆け寄ると「気づかずに踏んでしょてん」と涙を流しました。毎日、たくさんお世話してきたHさんの心を思うと辛かったです。近くで見ていた友だちもHさんの背中を擦りながら潰れてしまった蚕を持って土に埋めてあげました。

・Cさんのエピソード『桑の葉っぱって美味しいの?』

「なんで蚕さんって桑の葉っぱしか食べへんの?美味しいのかな?」と疑問に思ったCさん。保育士から「Cちゃん味見してみてよ」と言われると少しちぎって口に入れていました。すると「ん?美味しいかも!」と言った瞬間「苦いー、ペっ」と吐き出していました。「よくこんな苦い物食べられるなー」と躊躇せずに桑の葉っぱを口にした勇氣あるCさんでした。

・Fさんのエピソード『ムシャムシャ』

Fさんは発達がゆっくりで語彙も多くありませんが、蚕に興味があり、優しく蚕に触れることができます。ある日、Fさんが葉っぱを食べる蚕をじーっと見つめていました。「蚕さんご飯食べているね」と声を掛けると「ムシャムシャ」と同じように口を動かして食べている真似をしていました。「美味しい?」と聞くと「おいしい」とにっこり笑顔が可愛かったです。



約1ヶ月の間、お世話をする中で子どもたちは感触、音、匂いなど五感を使って蚕と関わっていました。また、玄関ホールに置いていることで送迎時に親子で蚕に触れたり、話題にしたりと親子のコミュニケーションにも繋がっていました。蚕が糸を吐き始め、繭を作る準備をする5歳の時期になりました。繭になっていくところを間近で見たいと思い、牛乳パックで個人用の蚕の部屋を作り、家でじっくり観察できるように持ち帰ってもらいました。次の日の朝に「〇〇と一緒に繭になる美しい瞬間が見られまし



た」と初めは蚕が苦手だったお母さんたちまで蚕の魅力に夢中になっている様子でした。全て繭になったことを確認し、子どもたちと繭の数を数えました。卵のバックケースに10個ずつ繭の入れ替えを繰り返し、462個の繭を数えきりました。

④ 繭から糸を取ること、糸繰りについて子どもたちと考える

蚕が全て繭になった頃に、子どもたちと『命』について話をします。前文②でも述べましたが、私自身一人ひとりが愛着を持って育ててきた蚕の命をいただくことに対して子どもにどのように話をするのか非常に悩んでいました。

繭を数え終えた後、クラスの子どもたち30名が集まり話をしました。繭を糸繰りしている絵を見せながら「これは何をしていると絵やと思う？」と問うと「わからへん」とほとんどの子が答えていました。「じゃあ、このお鍋の中に入っているのは何やと思う？」と問うと「蚕の繭や」と言った後、「あ、これ糸繰りしてるところや」と一人の子が言っていました。「何で知ってるの？」と聞くと「前のぞう組さんがやってた」と昨年度の年長児の糸繰りを見ていた記憶があるようでした。糸繰りをする事で蚕が死んでしまうことを「命をいただくことに感謝をして繭で制作物を作る」という言葉で伝えた後、過去の繭を使った卒園制作や繭人形を見せました。繭や生糸でいろいろな制作物が作れることを喜び、口々に「ドレス作りたい」「かぼん作りたい」など作りたい物をあげていました。その一方で「絶対いやや、かわいそうやもん」「蛾を旅立たせてあげたい、卵を産ませてまた蚕さんにしたい」と命をいただくことを拒む子もいました。

何かを作りたいと思っている子たちは蚕の命に目を向けずに「作りたい」という思いだけが先行しているような様子でした。このままでは「蚕の糸で何かを作る」だけの取り組みになるのではと思いました。その原因に自分の伝え方に問題があったと考えました。

・子どもたちに繭で制作物が作れることを必死に伝えようとしたことで重要な命について考える気持ちが薄れてしまったのではないか

・クラス全員が集まり話をしたことで一人ひとりの言葉に耳を傾けられず、表情も十分に見ることができず、騒がしい雰囲気のまま話を進めたこと

もう一度、担任間で入念に打ち合わせをして、まずは子どもたちの率直な思いを聞き取ることになりました。それを聞いた上で今後の蚕飼育をどのように進めていくか検討していきたいと思いました。

- ・命をいただくことに対して自分の思いを言う、また友だちの思いを聞く
- ・少人数で話をする事で、話をしやすい環境を作る
- ・少人数で話をした後、みんなの思いを共有し合う

以上のことを話す上で大切に、話し合いを行いました。

翌日、ゆっくりと話しのできる場所で少人数ずつ集まり、もう一度糸繰りが描かれている絵を見せながら「この絵を見てどう思う？」と聞きました。「かわいそう」「でも服とか作るためには必要なこと」など思い思いに話しをしていました。そこから一人ひとりに話を聞いていきました。

- 「かわいそうやけど、糸繰りをして繭でお洋服を作りたい」
- 「中に蚕さんが入ってるし、燃やしたら死ぬし悲しくなる」
- 「かわいそうやから、ずっと育てたい」
- 「〇〇ちゃん（友だち）が悲しそうやから、蛾になるところを見たい」
- 「絶対、糸繰りはしたくない、かわいそうやから」
- 「蚕さんが中にいるけど、人は服を着て生きているから服がなかったら死んでしまうし、感謝をして何かを作りたい」
- 「命をいただいてドレスを作りたい」
- 「蚕さんの命をもらって、わたがしを作る」
- 「蚕が中にいるけど服を着ないと生きられないから感謝をして服を作る」

子どもたちからたくさん思いを聞くことができました。蚕が死んでしまうことを悲しむ子が多かったです。しかし、昨日とは違い「かわいそうやから・・・」「かわいそうやけど・・・」と話す子が多くなりました。ただ「何かを作りたいから！」ということだけではなく、何かを作るために命をいただくことをしっかり感じてくれていることに気がきました。少人数



の静かな空間で話をする中で友だちの思いに対して頷いて共感したり、思いを聞く中で新しい考えが生まれたり、普段話すことが得意でない子も自分の思いを伝えてくれたりすることができました。担任も子どもたちの表情を見たり、話す声のトーンを聞いたりして、子どもたちが真剣に命について考えているのだなと向き合いながら進めることができました。

子どもたちと『命』というなかなか答えが出にくいテーマを話し合うことをしましたが、自分のことだけでなく友だちのことに目を向けたり、興味を持ったりする姿が印象的でした。蚕飼育を進める上で、一つだけのやり方で進めていくことに疑問も感じました。自分で出した思いが反映された経験から、一人ひとりが今まで以上に蚕に興味を持ってくれるのではないかと、そしてそれを友だちと共有する中で一人ひとりが考えを広げられるき

っかけになるのではないかと思い、

- ・成虫になるところを“みんな”で見て卵を産み命が繋がる美しさを感じてほしい
 - ・“みんな”が糸繰り体験をして綺麗な生糸が取れるところを見てほしい、知ってほしい
- と全員が集まったときに話をしました。どちらの気持ちもわかってほしいしどちらの素晴らしさも知ってほしいということを伝えて今後の蚕飼育を進めることにしました。

⑤ 成虫になるところが見たい

「成虫になるところを見てみたい」という子はクラスの半分くらいでした。繭の入った牛乳パックのケースと大事そうに見つめながら成虫が出てくるのを待ちます。2週間ほどが経った日の朝、繭から成虫が出てきました。完全変態した成虫を見て初めは戸惑っていた子も多かったのですが、すぐに手のひらの上のにせていました。「顔は蚕さんに似てる」「お腹の大きさが違う」などよく観察しています。蛾になった蚕蛾は、逃げないように半分に切った紙コップの中に入れました。



また、成虫の入った紙コップは玄関ホールに置くことでお迎えに来た保護者や他クラスの子どもたちにも、成長していく様子を共有できるようにしました。「〇〇の蚕さん蛾になったんやで」と通りすがりの職員に声を掛けている姿を見ると“私の蚕”という意識がより強く芽生えているようです。

そして成虫が交尾を始めます。お尻とお尻をくっつけて交尾する姿を見て「これって結婚してるってこと？」と言う子もいます。そして無数の小さな卵を産み役目を終えた成虫は亡くなっていきます。亡くなった成虫を見て悲しそうな顔をする子もいれば、「卵から早く赤ちゃん産まれてほしい」と次の命に目を向ける子もいます。亡くなった蚕を子どもたちと園庭の桑の木の近くに埋めてあげました。「ありがとう蚕さん」と言って桑の葉っぱや花を供えて感謝の気持ちを伝えていました。

⑥ 繭を使っての制作（繭人形作り）と糸繰り

繭を使った繭人形作りを伝えます。繭をハサミで切ると、中から蛹が出てきます。その繭にペンで絵を描いたり、ポンドで毛糸やビーズを貼り付けたりして一つの作品ができあがります。中から出てきた蛹は園で飼っている亀（名：ももたろう）の餌となります。少し残酷ですが、子どもたちはももたろうに餌をあげたいと進んで蛹を亀のいる水槽に入れていました。

・Yさんのエピソード

Yさんは当初、繭で制作物を作ることに對して猛反対していました。繭を切り開き、中から出てきた蛹を見ると「寒そう」と言っていました。触れるとプニプニと動く蛹。「かわいい」と愛おしそうな目で見えています。すると、Yさんは紙とペンを用意し、蛹の絵を描きました。蛹をケースに入れて「この子はプニちゃん」「持って帰ってお世話するわ」と言い、桑の葉っぱも入れてお家で様子を見ていたそうです。翌週、悲しそうな表情で「プニちゃん死んじゃった」と教えてくれました。プニちゃんどうする？と私が問うと、「んー」としばらく悩み、「ももたろうにあげるわ」と言っていました。ももたろうに蛹をあげに行く時も躊躇していましたが、食べてくれて嬉しそうなYさんでした。これまで蛹をももたろうにあげることはありませんでしたが、プニちゃんを亀の餌としてあげようと決心した姿がありました。Yさんに理由を聞くと「ももたろうもお腹減ってるからね」と答えていました。

そして糸繰りをする時がきました。繭から糸を取るには、50個超の繭を鍋で煮て、わらで作った刷毛で糸口を出すところから始まります。ベテランのF先生に応援をお願いし、見事な手さばきで細い糸をかき集めて一本の丈夫な糸となりました。それを座繰り機に巻き付け、ハンドルを回すと糸が取れます。子どもたちも糸が切れないように慎重にハンドルを回していきます。

繭を鍋に入れると「熱そう」「かわいそう」など蚕の気持ちになりながら見ていました。保育士が「蚕さんありがとう」の思いで手を合わすと子どもたちも手を合わせています。ハンドルを回すと細い糸が集まり一本の丈夫な太い糸となります。子どもたちも「おおー」と歓声があがるほどです。玄関ホールで行っていたので、通りすがりの3歳児クラスの子も物珍しさに足を止め「何してるの？」と聞かれます。ぞう組の子も「みんなで育てた蚕の繭で糸繰りしてるねん」とどこか誇らしげに伝えていました。糸繰りが終わると、鍋の中には黒くなった蛹だけが綺麗に残っています。それを子どもたちに見せると「真っ黒になって死んでる」「かわいそうやけどありがとう」と言い、「埋めてあげよう」とすぐに園庭へ行き埋めました。



一日がかりの糸繰りでしたが、子どもたちは糸繰り体験を楽しんでいる様子でした。しかし、端々で「かわいそう」「死んじゃった」という言葉が聞かれました。蚕が死んでしまうことを頭に残しながら糸繰りをする姿が印象的でした。糸繰りされた糸を見ると「黄金の色や」「綺麗やな」とその美しさに圧巻されている様子でした。

⑦ 終わりに

1994年に子どもの権利条約が日本で批准されました。たかつかさ保育園でも『一人ひとりの子どもを大切に』を保育理念にして日々の保育にあたっています。子どもの権利条約の第12条では、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。と述べられています。

年長児の子どもと命について考える中で、子どもが自分の思いをありのままに伝えられるようにと意識をしました。年長という年齢でも、命について考える時に、真剣な表情になったり、言葉を選んだりと重く受け止める姿がありました。それを周りの友だちや保育士から共感を得たり、話す中で新しい考えに触れたりしました。前文⑥のエピソードでも述べたYさんの中でも蛹のプ二ちゃんをももたろうの餌にすることには葛藤があったと思います。しかし、周りの友だちが楽しそうにあげる姿やYさんがももたろうにも思いを寄せる姿があり、Yさんの中でも自分の経験に基づいてプ二ちゃんを餌にしようと決心がついたのだと思います。Yさんの考えが広がった瞬間でした。まずは、自分の思いを言葉にすることが自分の考えの幅を広げる第一歩だと考えます。

生きものとかかわることは命の大切さを知ることができ、結果として豊かな人間性の涵養につながるとして、保育でも常に重視されてきました。一方で、私たち人間は、生きものの命を奪うことによってしか生きていけない矛盾を抱えた存在です。

蚕の命をいただくことを伝える中で、人として生きるために必要であるということも同時に伝えたいと思っていました。目の前の命を殺さずに生かしておきたいと思う子も実際に糸繰りや繭人形作りを経験することで、服やドレスを作るための綺麗な生糸を取れることを知り、自分たちの生活が豊かになることを肌で感じてくれたと思います。逆も然りで、新しい命の誕生を目の当たりにしたことで、蚕の生態を知り、より愛着を持って次の命に目を向ける経験になりました。前文にもあるように生き物の命を奪うことは矛盾のあることだと思います。そのようなことを実際に経験し、自分の中で考え、感じる事が『自分』を作っていくのだと考えます。

子どもたちが大人になり保育園時代を思い返した時に「蚕さん育てたな」「命をいただいて繭人形作ったな」と思い返してくれることが、たかつかさ保育園にやってきてくれた蚕さんに対しての感謝になると思います。ありがとう蚕さん。



参考・引用文献

- ・日本ユニセフ協会『子どもの権利条約』 第12条.1
- ・井上美智子・無籐隆・神田浩行（2010）『むすんでみよう子どもと自然』
- ・加藤繁美（2023）『保育の中の子どもの声』